
男と死神

シド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男と死神

【Nコード】

N7423J

【作者名】

シド

【あらすじ】

あるところに死にたがりやの男がいた。痛い思いをするのは嫌だ。辛いのも面倒くさいのも勘弁だ。怠惰に抱かれてまどろむ様にして死にたい……それが、彼が口癖だった。だがある日、そんな彼の元に死神が現れて――

あるところに、死にたがりやの男がいた。

男は死にたがりやだったが、彼はあくまで死にたいだけだった。彼としてはあくまで受動的に——そう、いつの間にか死んでいるような形が望ましい。自殺をしたり、わざわざヤクザに向かって喧嘩を売ってみたりといった積極的な行動に出る勇氣はなかった。

痛い思いをするのは嫌だ。辛いのも面倒くさいのも勘弁だ。怠惰に抱かれてまどろむ様にして死にたい……それが、彼が口癖だった。けれど、そういう考えている内にまた無意味な一日が過ぎて行く。その事実がまた、彼の持つ死への願望を煽るのだった。

ある日、死にたがりや男はいつものように曇った空を見上げて小さく呟いた。

「ああ、全く。死神が僕の命を奪いに来たりしないかなあ。そうすれば僕も楽に死ねるだろうに」

無論、彼もそんなことを言っただけで実際に死神が来ない事なんて分かっている。

——けれど、その言葉をどこかで聞いていたのだろう。

再び歩き始めようとした彼の目の前に、突然ふわりと黒い人影が舞い降りた。

「こんにちは、死にたがりやのお兄さん。どうやら私をお呼びになったようですね」

彼の前に現れた死神は、痩せこけた頬で陰気な顔をした長身の男だった。手にはお決まりの大鎌を持ち、黒いローブを着込み、肩にはカラスまで乗せている。

「そんなに死にたいのであれば私が殺して差し上げましょう。痛みもなく一瞬で死ねますよ」

「へええ……」

死神の持つ大鎌を見つめながら、彼は不安そうな表情を浮かべた。「それ本当ですか？　だって、そんな痛そうなのを持っているのに」

その言葉に、死神は大鎌を掲げてみせると、

「大丈夫です。鎌はただの飾りです。実際にこれで首をはねるわけじゃありません」

「そうなんですか」

そう言っただけで彼は死神の来ている黒いローブに視線を移した。

「でも……その格好もなんか怖いですよ。まるで魔女みたいだ」

その言葉に、死神は黒いローブの裾を少しつまんでみせると、

「大丈夫です。これも格好だけです。汚れが目立ちにくいので着てるんです」

「なるほど、ちゃんと理由があるんですね」

と、今度は肩の上に乗ったカラスを見つめ、

「だったら、そのカラスはなんなんですか。不吉な印象を受けますけど」

その言葉に、死神はカラスの頭を撫でてみせると、

「ペットです。可愛いでしょう？」

「そうですか？」

「可愛いですよ」

「……そうですね」

彼はあっさり頷いた後、考え込むかのように口元に手をやった。

「ふうん……後はですね。そうだなあ、こう言うのもなんですけど。死神さんは少し不気味な顔立ちをしていますね。なんだか本当に疫病神みたい……」

その言葉に、死神は僅かに眉をひそめてみせると、

「正面きって失礼なことを言いますね、あなたは。何かと文句をつ

けて、実は死にたくないだけなんじゃないですか」

「いやいや、そんなことはありませんよ死神さん」

「本当ですか？」

「本当ですとも。僕はね、ただ何にも嫌な気持ちを抱えたまま死にたくないんです。出来ればさっぱりした気分のまま死にたい」

「……そうですか。分かりました、要するに私の顔が気に入らないんですね」

「有り体に言えばそうなりますね。どうせ殺されるなら可愛い女の子がいい」

「はあ……全く、ここまでワガママを重ねる方は久しぶりです」

死神はそう言っただけ息を一つついてから、ローブの裾を翻した。彼の視界を隠す形で浮かび上がった黒い布が、ばさりと音を立てる。再び視界が戻る——その時には、彼の目の前に高校生くらいの年齢をした可愛い少女の姿があった。相変わらずの大鎌と黒いローブが、妙なアンバランスさを醸し出している。

「これで構いませんか？ あなたくらいの年代の人が一番好む風貌を取って見たのですが」

「うんうん、完璧だ！　すごいね、死神さん。流石だよ！」

「ありがとうございます。では、構いませんね？」

「え？　あー……うーん……」

彼は何か迷ったそぶりを見せた後、死神の方にちらりと視線を向けた。

「本当に……本当に痛くないんですよね？　辛くもないし苦しくもないんですよ？」

「そうですね。本当に眠るように死ねます。今まで死神の仕事を体験なさった方はどなたも満足なさっていますよ」

「そんな、死んだ後のことなんか分からないじゃないですか」

「分かりますよ」と死神は言った。

「笑顔で死んでますから。幸せそうに」

「……そうですか。うん、そうですね」

いよいよ逃げ道がなくなつて来たのを感じて、彼は急にもじもじ始めた。

「あの、すいません。ちょっとトイレに行つてきていいですか？」

「今からですか？ どうせ死んだらトイレも何も関係ありませんよ」

「でも、死んだ後失禁するのつてなんか嫌じゃないですか！ さつきも言いましたが、僕は何にも嫌な気持ち——」

「はい、そうですね。分かりました。行つてきて下さい」

割り込むように発せられたその物言いから、彼は死神が徐々に怒りはじめて来ていることが分かった。

彼は近くの公園のトイレに駆け込むと、出来るだけゆつくりと事を済ませた。手を洗う時もわざわざ石鹸を使い、爪の間まで丁寧に洗つてうがいまでした。

「手は洗ったけど、体はまだ汚いなあ。ねえ、死神さん。僕、お風呂に入りたいよ」

「どうぞご勝手に。あなたの気の済むまでなさつて下さい」

死神も最早諦めたのだらう。黙つて彼の後ろについてきた。

彼は家に帰るなり、夕食を食べて風呂の準備を始めた。いつもはシャワーで済ませるところを時間をかけて湯を沸かし、入浴剤を入れてそれがちゃんと溶けるまで一時間近く待ち続けた。

「死神さん。死神さんもお風呂に入りますか？」

「馬鹿を言わないでください。死神がお風呂に入るはずがないでしょう。それに私は仕事ですよ」

「でもたまには汗を流さないと臭っちゃいますよ。僕は後でいいですから、お先にどうぞ。ちゃんと百まで数えてから出てきて下さいね」

彼はそう言つて無理矢理死神を風呂に入れると、その間に自分の部屋に行つて荷物を纏め始めた。

「まったくんでもないことになったぞ。死にたいとは思つてたけど、まさか本当に死神が来るなんて！」

彼にとってはあまりにも非現実的すぎる出来事だ。覚悟も心構え

もできていない。

彼は身の回りの最低限必要なものをかき集めると、それをリュックに詰めて玄関から外へと飛び出した。

「どこへ行かれるおつもりですか」

けれど、先にそれを察知していたのだろう。少し身奇麗になった死神は、既に玄関の前に立ち塞がっていた。

「いや、ちよつと忘れ物を取りに……」

「嘘を言っではいけませんよ。忘れ物を取りに行くのに、どうしてもそんな大きな荷物が必要なんです」

「あれ、知らないんですか？ 最近こういう大きなリュックサックを背負うのが流行ってるんですよ」

彼がそう言っではぐらかすと、死神は眼をつり上げた。

「あなたは死にたい死にたいと言っていながら、結局死にたくないんでしょ。でなければどうして逃げ出すような真似をするんですか」

「いや、だからそれは心残りを消化するために――」

「忘れ物が心残りですか？ トイレもお風呂も全て？ それでは人生そのものが心残りなのとどう変わりがありませんよ」

「死神さん、少し落ち着いてくださいよ。僕はね、死にたがりやだけれど人生に絶望している訳じゃないんですよ」

「……つまり、それは死にたくないということですか？」

「そりゃ、僕は死にたくですよ。でも、死にただけなんです。ねえ、死神さん。死んでもいいからおいしいご飯を食べたり、温かいベッドで眠ったりする方法ってないですかね」

その言葉に、死神はとうとう我慢の限界に達したようだった。

「そんな死にはなんの意味もありません。ばからしい……私は帰らせてもらいますよ」

「あれ、もう帰っちゃうんですか？ 折角だから一泊くらいしてあげばいいのに」

「あなたは要するに死にたがりやなのに、死体にはなりたくないの

でしょう。人生に絶望していないのに、生きているのが嫌なんでしょう。そんな矛盾を抱えた人にこれ以上付き合うのは時間の無駄です」

死神はそう言うと、彼から背を向けた。

……彼はその背に声をかけた。

「ねえ、死神さん。もしかして僕のような人間ってのは珍しいんですかね」

死神は答えた。

「この世にはあなたのような人間が腐るほどいますよ」

死神はそう言って姿を消した。

彼は死神の消えたところを見ながら、ぽつりと呟いた。

「……ああ、死にたいなあ」

彼の声は闇に溶け込み、ひっそりと消えてしまった。

（終）

（後書き）

昔サークルで書いた小説です。童話・寓話というよりはユーモア小説に近いかと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7423j/>

男と死神

2010年10月8日13時40分発行